2. 哲学基礎文化学系

哲学基礎文化学は人文学研究の基礎的領域を包括する。文化の領域について，文学研究や歴史研究とくらべると，もっとも根本的な原理を追求するという特質をもっている。たとえば歴史を記述する学問では，「実証的な真理」は自明の前提とされるだろうが，哲学基礎文化学系の学問では「実証とは何か」という問いが掲げられる。学問･文化という人間の営みを，人間のすべての営みと関連づけて考察することが，哲学基礎文化学系の学問の課題である。思想文化は断片的なものではなく，人間の生の全体に関わり，生きた統一体としてまとまりのある知の体系をなしている。その全体を真善美聖という観点から探求するのが哲学基礎文化学系の学問であるということもできよう。

哲学基礎文化学系には哲学，西洋哲学史，日本哲学史，倫理学，宗教学，キリスト教学，美学美術史学の各専修が含まれる。真なるものを真の観点から探求するのが哲学である。真理とは何かという研究領域は，従来「認識論」 と呼ばれてきたが，現代では，論理学，科学哲学が重視されている。それに対して善なるものの探求に携わるのが倫理学である。生命倫理，環境倫理など具体的な問題と「善とは何か」という原理的な問いとの接点を保ちながら，倫理学の営みが成り立っている。美学は美なるものを探求する。「美」には「真」という意味が含まれるのか，どうか。ポップアート以降の現代美術はいかなる意味において「芸術」なのか。異なる文化の間で芸術はどのような社会的機能を発揮しているか。美学･美術史学の領域では〈美学･芸術学〉，〈美術史学〉，〈比較芸術史学〉という三分野の有機的な連携で，研究活動が展開されている。聖なるものの探求に携わるのが宗教学，キリスト教学である。人間の生にとって宗教がどのような意味をもつのかを主に哲学的見地から考察するのが，宗教学であり，特定の教義や信仰をはなれて，純粋に学問的な見地から批判的共感をもってキリスト教思想を研究するのが，キリスト教学である。

他方，思想や美の理論的体系的な研究は思想史，美術史等の歴史的研究を不可欠の前提としている。西洋古代，中世，近世哲学史を含む西洋哲学史と日本哲学史の研究は体系的な思想史の確立に不可欠である。思想の真の創造は思想史への深い畏敬と洞察を前提とするものであり，同様に美や芸術の体系的な理論構築も美術史，比較芸術史の研究なくしては不可能である。人間存在が根源的に有している歴史性への深い洞察なくして思想文化の創造はあり得ない。理論研究と歴史研究からなる哲学基礎文化学系は，現代が内包する諸問題と最も根源的かつ綜合的な観点から対決する学問分野といえよう。

哲学基礎文化学系は旧「哲学科」を母胎とするが，小講座制の枠を取り払い，学際的な教育体制を確立しようとするものである。哲学基礎文化学系への分属を希望する者は，系を構成する全専修への広い関心が期待される。個々の専修への分属は，哲学基礎文化学全体への少なくとも概観的な理解を得た後になされることが望ましい。

哲学基礎文化学系に進もうとする学生諸君に期待されることは，第一に，しっかりした語学力である。どの専修でも外国語の文献を正確･綿密に読みこなす力が必要になる。外国語を学ぶことは楽しいという気持ちを最初に知ってほしい。

第二に期待されることは，資料を扱う際の厳密さである。他人の業績を利用する際には必ず出典を明記する等の，誠実でフェアな態度が，多くの情報がインターネットから得られる状況になった今日，ますます厳しく要求されている。

第三に期待されるのは，明確な表現力である。文献や作品の検討を通して自分の魂に刻み込まれたことを再表現するときに，おざなりな定型表現，借り物の美辞麗句，こけおどしの難解語を拒否して，自分に誠実な，そして他人に理解される表現を追求することが要求される。

■ 哲学専修

教　授	出　口　康　夫	近現代哲学・分析アジア哲学
准教授	大　塚　　淳	科学哲学　(生物学の哲学，　統計学の哲学)
特定准教授	大　西　琢　朗	論理学，数学・論理学の哲学
特定講師	五十嵐　涼　介	論理学史，論理学・情報の哲学

〔著書･論文〕

出口　*Nothingness in Asian Philosophy*,　Routledge, 2014.（共編著）
Moon Points Back, Oxford UP，2015.
What Can't be Said, Oxford UP, 2021.　（共編著）

大塚　Causal Foundations of Evolutionary Genetics (*British Journal for the Philosophy of Science,* 2016),
The Role of Mathematics in Evolutionary Theory, Cambridge UP, 2018.
『統計学を哲学する 』, 名古屋大学出版会, 2020.

大西　Substructural Negations (*Australasian Journal of Logic*, 2015).
Bridging the two plans in the semantics for relevant logic (New Essays on Belnap-Dunn Logic, 2020).
『3STEP シリーズ論理学』 昭和堂，2021 年.

五十嵐　情報の哲学史試論――『ポール・ロワイヤル論理学』・ライプニッツ・カント――（『哲學研究』，2023）
判断はどのようにして対象と関わるか： カントにおける単称判断とその意味論（日本カント研究，2017）
A reconstruction of ex falso quodlibet via quasi-multiple-conclusion natural deduction (Logic, Rationality, and Interaction，2017)

哲学専修は，文学部の専修の中でも，研究対象の選択の自由度が最も高い場所の一つである。専修の名前が「哲学」だけだというのは，国文学や仏文学にまじって「文学」専修があるようなものである。一段と高いはずの分類項目が，より細かい項目の間に紛れている現象。これを哲学の用語では，カテゴリー･ミステイクとも言う。しかし，これは正当な理由のあるミステイクなのである。

本専修は京大文学部創設以来の研究室であり，その後，西洋哲学史の各講座を含め哲学系の研究室が次々と設立された後でも「哲学･西洋哲学史第一講座 (哲学)」にとどまり続けた。そこには言語圏や時代や分野を限定せず，広く過去の思想伝統を吸収し，その上で独自の哲学を生み出す「場」を確保しようとする，京大哲学科の意志を感じ取ることもできる。事実，「純哲」と呼ばれた本教室は，西田幾多郎･田邊元両教授を含む歴代教官･教員の下で，「京都学派」の根拠地となったのである。

というわけで，この伝統あるカテゴリー･ミステイクの産物たる本専修では，一生に一度くらいは，物事の根本についてじっくり考え抜きたいという学生諸君に大きく門戸を開いている。社会や国家の仕組みについて，科学や宗教の本質について，人生いかに生きるべきかについて。思索が，既存の個別学問の枠をはみ出し，その学問の基 礎を問い直す射程と気概を持つとき，それは何であっても「哲学」と呼ばれ，本専修の守備範囲に入ることになるのである。

具体的にどのような研究対象が選ばれているかについては，専修のホームページに出ている各種の情報，特に「所属院生」のページを見て頂きたい。

テキストを正確かつスピーディに読みこなすための語学力，自分で議論を展開するための論理的な力。何を対象に選ぼうとも，これらは哲学の研究にとって必須の基礎体力である。したがって，本専修が提供するさまざまな講義･演習は，この基礎体力をつけるトレーニングの場という意味合いを多分に持っている。また大学院生による読書会などの自主的な研究会活動が盛んなことも本専修の特徴である。学部生も，これらに積極的に参加し，「哲学力」を身に付ける一助とされることをお勧めする。

最後に本専修の卒業生の進路について。学部卒業生の約三分の一が大学院進学，残りが就職，というのがここしばらくの状況である。就職先としては，マスコミ･出版関係，国家･地方公務員，教員，司書など，概して文学部の他専修と同様の傾向を示している。また修士課程修了者の約半数が博士後期課程に進み，残りが就職している。就職先も，マスコミ･公務員･運送業･製造業と，学部卒業生のそれと比べて広がりに遜色はない。「文系の修士課程修了者は一般就職に不利」という通念は，もはや完全に過去のものとなったのである。さらに過去 15 年ほどの博士後期課程学修者の就職傾向をならして見れば，ほぼ毎年 1 名以上がアカデミック･ポストに就職していることになる。高等教育機関における思想系教員数の減少という全国的な傾向を考えれば，ここでも本専修修了者の健闘は光っていると言える。

■ 西洋哲学史専修

（古代） 准教授　早　瀬　　篤　　プラトンとアリストテレスの哲学
（中世） 教　授　周　藤　多　紀　　十三世紀のスコラ哲学
（近世） 教　授　大河内　泰　樹　　ヘーゲルを中心とする近現代哲学

〔著書･論文〕　早瀬 'Dialectic in the *Phaedrus*' *Phronesis* 62, 2016. 「プラトン『パイドン』における形相原因説」(『哲学研究』608 号, 2022).
周藤「トマス･アクィナスの《モドゥス》研究（一）（二）」(『哲学研究』第 608-609 号，2022-23 年).
Boethius on Mind, Grammar and Logic, Brill, 2012.「中世の言語哲学」（共著）(『西洋哲学史 II』講談社，2011 年)．ジョン・マレンボン『中世哲学』岩波書店, 2023 年（訳、解説）
大河内 *Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2008(単著)『個人的なことと政治的なこと――ジェンダーとアイデンティティの力学』彩流社，2017 年(共著) ,『はじめての政治思想』ミネルヴァ書房, 2021 年(共著), 『資本主義と危機　世界の知識人からの警告』岩波書店, 2021 年(共著).

（古代）本研究室が求めるのは，「気ままに粘土細工を拵えるより硬質の大理石を刻むように」哲学を学ぼうとする精神の持ち主である。つまり哲学をその成立の現場にまで遡って本格的に考えようとする志と古代ギリシア語の習得や文献学的訓練を厭わない忍耐心とを併せ持つ(あるいは持ちたいと思う)諸君の志望を期待する。ハードルは高いかもしれないが，学生諸氏は研究室で互いに切磋琢磨しながらこれをクリアしてきているので，心配はいらない。具体的な研究領域は初期ギリシアから後期ローマまで広範多岐にわたり，研究の対象と方法は各人の選択に委ねられるが，プラトンとアリストテレスの哲学を学ぶことは，他のテーマを主題とする研究にとっても要件となるだろう。本研究室を中心として「古代哲学会」が組織され，その機関誌『古代哲学研究(メトドス)』はすでに 55 号を数えており，最新の研究に解れる機会を提供している。
（中世）本研究室への分属を志望する者の条件は西洋中世哲学への関心と熱意である。西洋中世は時代的にも地理的にも広範囲にわたり，思想上も大きな多様性(論理学から神秘思想まで)がある。指導するスタッフの力量に限界(主にラテン語著作)があるとはいえ，何を研究の中心とするかは各人に任される。ただし，翻訳での理解には限界があり，まだ翻訳が存在しない原典も多いので，原典を読むために必要な語学(多くの場合，中世ラテン語)の修得は避けられない。また，日本で研究がすすんでいない思想家も多いので，参考文献を読むための欧米近代語の習熟も望まれる。授業のほかにも，本研究室出身者を中心とした京大中世哲学研究会(機関誌『中世哲学研究(VERITAS)』)で視野を広げる機会が得られる。
（近世）近世哲学史専修は，近世から現代にかけての西洋哲学を対象範囲とし，地理的にも言語的にも時期的にもまた哲学的傾向からいっても多様な哲学者・哲学説がそこには含まれている。志望学生に求められるのはそうした中から自分が関心を持った哲学者や哲学的問いに熱意をもって取り組むことである。どの哲学者や哲学思潮を研究対象とするとしても，事柄としての哲学と哲学的テクストとの両方に誠実に取り組むことが求められる。その際には，研究対象とするテクストが書かれたオリジナルの言語で取り組むことが原則として求められる。研究室という場は，教員から指導を受ける場であると同時に学生同士が学びあい，切磋琢磨しあい，またサポートしあう場である。自らの思考と知識を，議論を通じて深化させていくのと同時に，仲間の主張には関心を開いて耳を傾け，相互の研究に貢献し合う姿勢が求められる。

■ 日本哲学史専修

教　授　　上　原　麻有子　　西田哲学をはじめとする近代日本哲学，身体・技術・芸術論，翻訳学，女性哲学
助　教　　ウィルツ・フェルナンド　　京都学派，ドイツ観念論，神話の哲学

〔著書･論文〕上原　「日本哲学の連続性」（共著『世界哲学史8―現代グローバル時代の知』、ちくま新書、2020年）、
「高橋、西田、ボーヴォワール、レヴィナスにおける性差ある他者性を問う」（共著*Transitions-Crossing Boudaries in Japanese Philosophy*, Chisokudō Publications, 2020年
「創造する翻訳―近代日本哲学の成長をたどって」（共著『近代人文学はいかに形成されたか 学知・翻訳・蔵書』勉誠出版、2019年）
「西田哲学の再解釈―行為的直観としての顔の表情」(『思想』No.1099，2015年)
ウィルツ　Phänomenologie der Angst. Tübingen: Mohr Siebeck, 2022; ‘Miki Kiyoshi’s philosophy of history and the historical role of myth’, Asian Philosophy (2022): 1-17; ‘Myth and Ideology in Miki Kiyoshi’, European Journal of Japanese Philosophy 5(2020): 75-102; ‘Die Schichten der Zeit Schellings Periodisierung der Geschichte und seine Kritik der homogenen Zeit im Rahmen seiner Philosophie der Mythologie’, Schelling-Studien 6(2018): 43-62

日本哲学は，比較的新しい学問分野です。明治初頭から西洋哲学が本格的に受容され始め，「哲学」という語が訳出され，そして「哲学」という学問が開かれ発展してきました。日本哲学とは，その発展を通して日本独自の思考法や課題をもとに生み出された哲学だと考えられます。

明治以降，日本における日本語で書かれた哲学が，いかに形成され成熟してきたのかについて考究する。これが本専修の主な研究課題です。京都学派の知的基盤を形成した西田幾多郎，そして田辺元，三木清，西谷啓治，あるいは彼らと思想的に近い九鬼周造や和辻哲郎、鈴木大拙などに関心をもつ学生が，国内外から本専修に集まり思索を深めています。日本哲学はその由来からして，根本的に比較哲学です。テキストには，カントやヘーゲル、ハイデガー、ベルクソンなどの西洋的思想が，また一方では仏教や儒教などの東洋的宗教の概念や論理が綿密に織り込まれています。だから言葉は自然と難解を極めます。日本哲学の深遠な思想を探求するためには，東西の思想をそこから掘り起す，外国語の原文も丹念に読解し，理解する，そして比較するという一連の作業が必須です。

しかし，難解なテキストの読解にどっぷり浸かった研究をすることだけで満足するのではなく，さらにそれが，今，私たちの生活，人生に対して意義をもつにはどうしたらいいのか，このようなことを念頭におきながら，日本哲学に取り組んでください。

近年、日本哲学の分野で研究されるテーマに大きな広がりが見えてきており、戸坂潤、柳宗悦、中井正一、廣松渉、大森荘蔵、井筒俊彦など、今までにまだ研究が十分進んでいない新しいテーマを求める学生が増えています。また、環境、倫理、数学、科学などの切り口による研究も出てきており、在籍している学生たちも、様々な方面からの刺激を受けて勉強に励んでいます。

卒業論文については，十分な参考文献の収集，またその厳密な検討が大前提となります。しかし，文献の単なる検討に終わることなく，研究対象として選んだ思想そのものに自ら取り組み，それを批判的に検討する目を養う，また同時に，自己反省的にその思想の立場や方法を検討し直す態度をもつことが必要です。

近年提出された卒論のテーマ，あるいは本専修が行っている様々な活動等についての詳しい情報は，HP 上で確認してください。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese_philosophy/jp-top_page/

■ 倫理学専修

教　授　　児　玉　　聡　　英米倫理思想史･応用倫理学

助　教　　CAMPBELL, Michael 規範倫理学・メタ倫理学

〔著書･論文〕 児玉『功利と直観』(勁草書房，2010)，Satoshi Kodama，『実践・倫理学』(勁草書房, 2020) "Bentham's Distinction between Law and Morality and Its Contemporary Significance.", *Revue d'études Benthamiennes*, (2019)，児玉聡「スペンサーの進化倫理学の検討」『哲学研究』603 号 (2018)
Campbell “Companions in Guilt and Moore's Paradox” (Symposion Vol.4 (2): 151-173 Nov 2017), “Absolute Goodness: in Defence of the Useless and Immoral” (Journal of Value Inquiry 49 (1-2): 95-112, Jan 2015), *Wittgenstein and Perception* (Campbell, M and O'Sullivan, M (Eds) Routledge Feb 2015)

本専修では，人間の行為を哲学的に考察すること，あるいは広義の「社会哲学」の研究を主たる目的とする。現代社会は，生命･環境･情報･ビジネスなどの分野で「倫理」という言葉が頻繁に使われている時代である。そうした現実的な諸問題に「対応」するのも倫理学の重要な仕事である。そうした作業は「応用倫理学」と呼ばれるが，それは既存の倫理学理論を現実問題に直接「応用」することを目指すものではない。むしろ現実の問題に正面から取り組むことを通じて，これまでの倫理学の学説や現在「倫理」として通用している様々な規範を批判的に検討することが求められている。「道徳」という現象をあたりまえのこととはせず，そこになんらかの「不可思議さ」を感じる諸君によって志望されることを望む。

本専修における最終的な卒業研究は，「応用倫理学」に属するものと「倫理学理論」に分類されるものに大別されるが，いずれを選ぶ場合でも，もう一方への目配りを欠かすことはできない。また，倫理思想史の全体を俯瞰することができるような歴史的研究も，手前勝手な思いつきや単なる意見の表明から真摯な学術研究を区別するための手段として重要な意味をもっている。

日常的な研究は，内外の文献の収集，精読が中心になる。そのため，志望者は，英･独･仏のうち少なくとも二つの外国語を習得しておくことが必須である。また，広い意味での哲学に関する他専修の講義や演習にも積極的に参加し，視野を広めることも重要である。コンピュータをはじめとする情報機器を用いた情報収集は現代の倫理学にとって必須のものとなってはいるが，たとえばインターネットにすべての情報があるといった安易な態度は厳につつしまねばならない。

研究室では，大学院生を中心にいくつかの研究会，読書会が定期的に開催されており，これに参加することは大きな刺激になるであろう。例年夏休みには，特定のテーマを集中的に勉強する合宿が開催されており，親睦を兼ねた重要な行事となっている。研究室の刊行物としては，40 年の歴史をもつ『実践哲学研究』や，いくつかのプロジェクトによって作成された資料集やサーベイ論文集があり，研究方向を定める参考になると思われる。

倫理学専修について，さらに詳細を知りたい方は，次の専修のサイトをご覧ください。

http://www.ethics.bun.kyoto-u.ac.jp/

■ 宗教学専修

教　授　　杉　村　靖　彦　　宗教哲学，現代フランス哲学，京都学派の哲学

准教授　　伊原木　大　祐　　宗教哲学，現象学，グノーシス主義の諸問題

〔著書･論文〕杉村『ポール･リクールの思想―意味の探索』(創文社, 1998), *Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps.*（共編著，Vrin，2013），*Mécanique et mystique. Sur le quatrième chapitre des* Deux Sources de la morale et de la religion *de Bergson*（共編著, OLMS, 2018）,『渦動する象徴―田辺哲学のダイナミズム』（共編著、晃洋書房、2021）、『個と普遍―レヴィナス哲学の新たな広がり』（共編著、法政大学出版局、2022）, *Témoignage et éveil de soi – Pour une autre philosophie de la religion*,（Paris, PUF,　2023）.

伊原木『レヴィナス　犠牲の身体』（創文社，2010），「悪の問題を再考する――現代哲学と反神義論」（『宗教研究』第 361 号，2009），「異端表象の哲学的利用――宗教史から反歴史へ」（『宗教史学論叢 26　越境する宗教史【下巻】』，リトン, 2020）,『3STEP シリーズ宗教学』（共編著、昭和堂、2023）.

「宗教」の名の下で問題になりうる現象は実にさまざまであり，それに対する学問的なアプローチにも多種多様なものがあるが，当専修は，哲学研究を軸としてそこから宗教にまつわる諸問題へと接近していくという研究姿勢を基本としている。このような姿勢の前提にあるのは，宗教とは単に例外的な経験や特殊な信条･組織の問題ではなく，人間が人間として世界の内にあることの根源，自己の存在の根源が問われる場にほかならないという洞察である。そこでは，「宗教とは何か」という問いは，哲学の根本問題とおのずから触れ合うことになる。このように宗教と哲学とが切れ結ぶ地点に立ち，そこで求められる思索の行方を追究すること，その意味での「宗教哲学」が当専修の基本的な方向性である。この方向性は，歴史的に言えば，西田幾多郎，波多野精一，西谷啓治，武内義範，上田閑照，長谷正當，氣多雅子という当専修の歴代の担当者が，多くの場合京都学派の哲学の展開との密接な連関の下で発展させてきたものである。

したがって，宗教史学，宗教心理学，宗教社会学，宗教人類学等々，およびそれらの方法論を駆使した記述的･実証的宗教学については，当専修のカリキュラムでは主題的に取り扱っていない。しかし，もちろんそうした分野に関する知識が不要だということではないし，学生諸君のそれぞれの関心に基づいた宗教現象･宗教思想へのアプローチを排除するものではない。

宗教哲学という学問の性格上，本専修では，各人が自分の関心に基づいて比較的自由に研究を進められるように配慮している。とはいえ，自らの問題を掘り下げてより深く展開していくためには，自分の手持ちの言葉や概念だけにしがみついているのではなく，優れた先人の洞察へと分け入り，それを丹念に学ぶことによって自己の思索を鍛え抜くことが不可欠である。それゆえ，欧米や日本の優れた哲学者･思想家の中から一人を選び，集中的に研究することから出発するのが望ましい。卒業論文は，そのような勉学の一つの到達点として位置づけられている。

ちなみに，ここ数年の卒業論文でとりあげられた思想家としては，ショーペンハウアー、ニーチェ，ベルクソン，ハイデガー，ウィトゲンシュタイン、レヴィナス，メルロ=ポンティ，親鸞，九鬼、田辺、西谷らの名を挙げることができる。この一覧からも分かるように，現在の担当教員の専門領域との関係もあって，現代の仏独哲学に関心を寄せる者が多いことが近年の当専修の特色である。

当専修を志望する学生には，何よりも研究への関心と情熱をもち，研究を深めていくために必要な訓練に耐えることが求められる。この訓練においては，必要な外国語文献を読みこなす語学力を身につけることがまずは不可欠である。文献研究自体が目的ではないが，それを抜きにして，宗教哲学の諸問題を究明していくための思考力を養うことは不可能だからである。したがって，英語，ドイツ語，フランス語のうち少なくとも二ヶ国語でテクストを読み解く力を身につけることが目標とされる。とくに大学院への進学を希望する学生の場合は，このことは必須の条件となる。そうした努力を惜しまなければ，当専修は，真の意味でラディカルに思索することを学ぼうとする者にとって，刺激的な環境となるはずである。宗教思想と哲学探究との接点，現代哲学の先鋭的な問題提起，京都学派の哲学の蓄積等，さまざまなコンテクストで学生諸君の思索の糧となるものが見出されるであろう。

授業については，専任教員による特殊講義や演習に加えて，学外からの非常勤講師によって専任教員の専門外の分野を補うように配慮している。また，大学院生を中心にして数々の読書会，研究会が運営されており，学部生も関心に応じてそうした会に参加することができる。詳しくは宗教学研究室 HP を参照されたい。

■ キリスト教学専修

教授　　津　田　謙　治　　古代・中世キリスト教思想，教父学，教理史，異端研究

〔著書･論文〕津田『神と場所 ― 初期キリスト教における包括者概念』知泉書館，2021.　『マルキオン思想の多元論的構造』一麦出版社，2013.　「オリゲネスにおける神的場所概念の考察 － 『祈祷』の議論を主軸として」(『基督教学研究』38 号，2019).　「初期キリスト教教父思想におけるオイコノミア概念 － 否定神学，悪の問題を手掛かりとして」(『宗教研究』389 号，2017).「護教家教父思想における神の場所の問題」(『宗教哲学研究』31 号，2014).

キリスト教とは何か。キリスト教の歴史をどのように理解するのか。キリスト教思想はいかなる現代的意義をもっているのか。

こうした大きなテーマを念頭に，キリスト教に関連した諸問題に対して多様な方法を用いてアプローチし，根本的な分析・考察を行うために，キリスト教学専修は始まりました。その創立は，1922(大正 11)年に遡りますが，特定の信仰や教義と結びつくキリスト教神学(神学部)とは異なり，キリスト教を純粋に学問的な見地から研究することを目的とし，現在，キリスト教の歴史と思想の全般にわたる研究教育を行っています。

キリスト教が西洋ヨーロッパ世界の思想や文化の伝統的な基盤であることは言うまでもありませんが，現代のキリスト教は，アジアやアフリカを含む世界の全域に広がり，今も新しい文化世界を生み出し，また人類全体に多くの影響を及ぼしつつあります。皆さんは，このようなキリスト教の新しい動向をご存じでしょうか。

キリスト教学専修では，こうしたキリスト教という広範かつ多岐にわたる研究対象にアプローチするために，関連する諸研究分野と連携し多面的な角度から研究教育を進めています。たとえば，古代から現代までのキリスト教思想家が残した文献テキストの読解に基づく文献学的歴史学的研究はもちろん，キリスト教についてのフィールド調査やキリスト教芸術作品(建築，絵画，音楽，文学)の分析など，様々な研究方法が考えられます――実際，最近のキリスト教学専修では，日本とアジアのキリスト教(特に中国と韓国)について，フィールド調査を含めた研究を行っています――。こうした中で，特に研究教育の力点が置かれているのは，次の分野です。

1．聖書の思想研究(旧・新約聖書学)
2．キリスト教思想史研究(特に，古代教父，宗教改革，近現代キリスト教思想)
3．キリスト教思想の体系的･宗教哲学的研究

以上の研究教育のいずれにおいても，文献テキストの読解が中心であり，テキストの厳密な理解が大切になります。したがって，キリスト教専修では，文献テキストに基づく研究を行うのに必要な語学の習熟が求められます。また同時に，キリスト教の歴史と思想に関連した歴史全般(哲学史や宗教史を含めた)についての幅広く深い知識も重要です。しかし，キリスト教学を学ぼうとする者には，キリスト教という対象と正面から学問的に向き合おうとする知的好奇心と，それを実現するだけの学習意欲が望まれます。

授業は，専修スタッフによる講義，特殊講義，演習，講読のほか，学外からの非常勤講師によって，キリスト教研究の主要な分野をカバーするように行われており，さらに他専修との関連授業も含めることによって，キリスト教についての十分な学習が可能になるように配慮されています。なお，津田教授は，古代から中世にかけてのキリスト教思想(教父学・教理史)，あるいは近代ドイツのキリスト教思想(自由主義神学・宗教哲学)を中心に教育・研究活動を行っています。

キリスト教学専修について，さらに詳細を知りたい方は，次の専修のホームページをご覧ください。

http: //www. bun. kyoto-u. ac. jp/christian_studies/cs-top_page/

■ 美学美術史学専修

美学･芸術学

准教授　杉　山　卓　史　　美学・感性論

美術史学

教　授　平　川　佳　世　　西洋美術史

准教授　筒　井　忠　仁　　日本美術史（特に近世絵画史）

准教授　田　中　健　一　　日本美術史（特に仏教彫刻史）

〔著書･論文〕 杉山 「Empfindnis 概念小史」(『哲学研究』第 605 号、2020 年）. *Computational Aesthetics,* Springer, 2019（共著）. 同「「われ感ず，ゆえにわれ在り」のヘルダーにおける成立」(『美学』246，2015).

平川 *The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Peter Lang, 2009. 同「スプランゲル作《最後の審判》―銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」(『京都美術史学』1, 2020)

筒井「又兵衛絵巻の伝来と享受」『岩佐又兵衛展』図録(福井県立美術館，2016 年) 筒井編『仏師と絵師：日本・東洋美術の制作者たち』(思文閣出版、2023 年)

田中「法隆寺金堂木造天蓋に関する諸問題」(『京都美術史学』第 2 号、2021 年)

本専修は，〈美学･芸術学〉，〈美術史学〉，〈比較芸術史学〉の三分野からなるが，これら三分野は密接不可分の関係にあるべきという方針で運営されている。

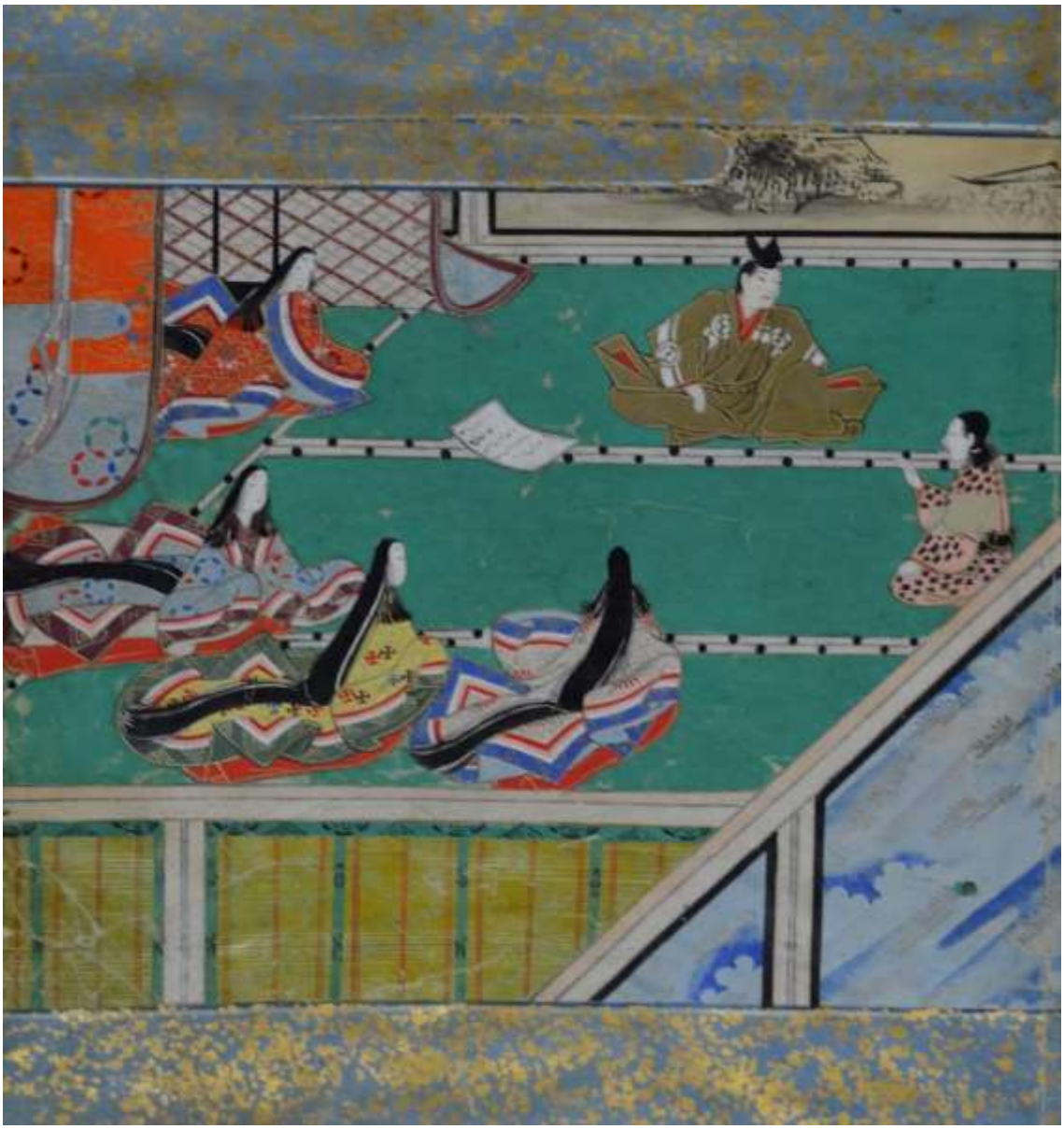
〈美学･芸術学〉は，美や崇高についての古典的議論から，芸術と社会，現代芸術，メディアアートまでを理論的に研究する。理論が現実から遊離しないように，新しい理論や思想に心を開くことは大切だが，現代芸術を考える時こそ，目先の流行にとらわれず，空間的･時間的視野を広くもって古典に立ち向かうことも重要である。美学･芸術学の文献は，英，独，仏，伊など近代語のほか，ギリシア語，ラテン語にまで及ぶが，外国語はたんに知識を得るための手段ではない。言語と思考とは不可分に結びついており，言語こそが特定の思想を可能にするのである。外国語には貪欲であってほしい。さらに今日では，科学技術がいわば共通言語のごとき力を振るっている。批判的思考を養うにはテクノロジーの問題を見据えつつ，その中で美と芸術を考えねばならない。

〈美術史学〉は，日本，東洋，そして西洋の美術史を作品に即して研究する。したがって本分野では，基本的な文献の研究とともに，実作品に即した実証的研究教育が重視される。美術史学の対象も，時代的，地域的に極めて広範囲にわたっているので早い時期に系共通科目の講義を受講するほか，日本，東洋，西洋など広い分野にわたる美術史の概説書を前もって通読しておくことが望ましい。また専攻する対象(例えば中国美術やイタリア美術)に関する文献の研究が基礎となるため，なるべく早い時期に研究対象に関わる語学を習得し，漢文，古文書等の基礎資料の読解力を養っておくことが望まれる。

〈比較芸術史学〉は，地域および時代を越えた広い視野から芸術の比較研究を行う。日本の異文化理解の仕方，逆に日本文化の異文化への影響，さらには異なる文化間の理解の可能性についての実証的研究等，今日ほど比較研究が必要とされる時代はない。従来の学問の枠組みが曖昧になり流動化している現状にあっては，比較芸術史学の果たす役割は，ますます重要になると予想される。この分野の研究者にとっても語学力が求められることはいうまでもない。以上三分野のいずれにおいても，その対象は時代的，地域的に極めて広範囲にわたっており，また，どの分野にとっても芸術作品をはじめとする芸術現象に即した研究が基礎となる。それゆえ，文献研究とともに，機会あるごとに博物館，美術館を訪ね，また演劇，文芸，音楽，映画などに接して各自の芸術経験を豊かにしてゆくことも重要である。

本専修の現在の教員及びその主たる研究領域は上記の通りであり，文芸学，演劇学，音楽学，映像学などの専任教員はいない。専門外の分野については，可能な範囲で，非常勤講師を依頼するほか，希望があれば，他学部･他大学の専門家を紹介することもある。本専修の研究が一層活発になるためには，芸術のさまざまな分野の研究が活発になる必要があることは言うまでもない。しかし，一方で，本専修の教員の専門外の分野の研究指導に関しては，高度の専門性という観点からは限界があるという点には十分に留意してもらいたい。なお，本専修の研究活動に関しては，ホームページを参照してもらいたい。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-top_page/



当研究室保管作品「たなばた」上巻
冊子装，縦 24.0 ㎝，横 18.3 ㎝，製作時期 17 世紀。室町時代後期から江戸時代初め頃に作られた日本の短編物語の代表的なものの一つ。